

尾崎 藍

1. 2020/7/31~2021/1/7 蚕の肌、藤沢、卵を茹でて、繭を茹でる

3. SILENT TANGO

2020 12' 50"

4. DIGEST

2019~2020 6' 23"

5. LIVE ON

2020 11' 28"

ひとは食べる前に料理をする。細かく刻んだり、ペースト状にしたり、煮たり焼いたりする。それは食べられる、消化できる状態にすることだとしたら、料理は消化の一部だろう。食べやすくするために道具を使う。調理器具から食具まで様々だ。箸の数え方は膳。月（にくづき）は身体の器官を想像させる。手に持つ箸に向けていた意識が、口から喉をつたい、その奥へと進んでいく。祖父の骨を箸で拾ったときのことを思い出す。家に戻り食事の際、祖父の話をしながらみんなで箸を持って食べる光景は骨上げがまだ続いているようで、骨壺は私たちの身体だった。

海辺を歩く。寄せては返す水の流れて石と石がぶつかり合い、少しずつ削れていく様子は鳥の消化を思い起こす。歯がない鳥は、飲み込んだ食べ物を砂や小石と一緒に砂嚢と呼ばれる消化器官ですり潰す。消化できない小石が食べ物の消化を助けるのだ。するとだんだん海が大きな消化器官に思えてくる。オオハシが硬く大きな嘴を器用に動かして手のひらにのせた餌だけすばやくそっと啜る。インコが手を端から噛んでいき、血が出ない程度に指先の皮だけを剥いていく。鳥は嘴で毛繕いや雛への給餌もする。人の手のように柔らかくなくても、とても繊細な動きができる。口から喉のその奥にいった箸は嘴のイメージになっていた。

海で強い日差しを浴びて肌がひどく日焼けした。皮が剥ける直前の肌は昔触った蚕の幼虫にそっくりだった。短い時間で大きく変化する蚕の身体と、小さな変化に気がつき始めた自分の身体を重ねてみる。幼虫から成虫へ、卵から繭までを観察した。蛹が入った繭を茹でて糸を取り、同じ鍋で今日も夕飯を作る。

